

JIA 第 80 回アーバントリップ見学会のご報告

実施日：2016年3月4日(金)

テーマ：「使い続ける住宅事例を訪ねて」

見学先：「小石川の住宅(「私たちの家」改修)
「上原通りの住宅」



「小石川の住宅(「私たちの家」改修)
特別講師：安田 幸一氏



「上原通りの住宅」
特別講師：奥山 信一氏
(東京工業大学教授)

今回のアーバントリップ見学会の案内には、「一つは昭和 30 年に竣工、その後増築を重ね、平成 25 年に改修を行った住宅。もう一つは昭和51年に竣工し、一部改修して使われ続けている住宅を体感するプログラムです。いずれも誰もが知っている名建築住宅です。」とありました。個人住宅はなかなか見る機会も少なく、ましてや名建築の貴重な見学会になったと思います。

その見学会は、後楽園駅のそばの礪川公園に集合してから始まりました。公園からしばらく歩くと最初の住宅がありました。

■小石川の住宅(「私たちの住宅」)

この住宅は、かつて林昌二、林雅子の住宅であったものを、安田幸一さんが引継ぎ、改修して住み続けている住宅です。

早速、住宅内に入ると安田さん夫妻が出迎えてくれました。

玄関から入ると、居間から庭に開放された空間あらわれました。最初にこの居間で、この住宅についての説明がありました。

この住宅が当初は1階建ての小さな住宅から増築などを重ねて、長い時間をかけて今の姿になったことを始めて知りました。

そして、安田さんがこの住宅を「骨格」は変えずに、「設備」と「設え」の更新をおこなって、住まうことになったとのことです。

説明後、内部の見学がありました。まずはこの居間の左側にある三角形平面の暖炉のあるダイニングキッチン

ン。ここがかつて、2人のふだんの生活の場所であったことが創造できました。

そして、この2つの空間をつなぐ水回り空間。特にウォークスルートイレとも言ったら良いのか、ちょっと目からうろこでした。

2階はかつての家主の休日の生活の場所とのこと。忙しい仕事の事を忘れる空間だったのでしょうか。1階と2階の空間を仕切る水平間仕切りまで用意している、念の入れようです。

まさに、生活の形がそのまま住宅の形となっている、1階は平日の場、2階は休日の場という特別解の住宅でした。また、家主がかわっても、住み続けていることが重要なのだと感じました。

私の大学時代の教授もたくさんの初期モダン住宅を設計していましたが、鉄骨だったこともあるのか、現在ほとんど残っていません。さまざまな理由から、解体せざる得ないことは仕方のないことではありますが、このような住まい続ける方法がもっと一般的に行なわれなかと、少し考えさせられる見学でした。

■上原通りの住宅

2つ目の見学先は篠原一男設計のある写真家の住宅です。

代々木上原駅から商店街を通り、ある路地を曲がると、そこに建築雑誌で見たことのある、この住宅が存在していました。

Y字型の柱と、2階のキャンチレバー、その上に載せられた半円形の頂部で構成されたが住宅が、そこにはありません。

篠原一男さんの建築は書籍ではたくさん見たことがありますが、実際に見たことのあるものは東京工業大学100年記念館ぐらいの私にとって、住宅街にたたずむ、この住宅には驚きを感じました。写真で見たことのあるイメージとまったく違う、ヒューマンスケールなかわいらしい住宅がそこにはありました。

東京工業大学の奥山信一先生にこの住宅の前で一通りの説明をしていただき、内部見学がありました。1階のピロティー空間から階段を上ると2階にこの住宅の玄関があります。見上げると斜めのガラス仕切りがあり、外部と内部を仕切っています。また、この玄関の木製扉がY字柱により頂部が斜めに切り取られた形になっていました。Y字形がいろいろと仕掛けてきます。

内部に入ると、中央のY字柱が我々を迎えてくれました。このどう見ても邪魔な存在のY字柱が2階の空間を形成しています。また、内部の合板仕上げの壁はコンクリート型枠をそのまま利用しているとのこと。またしても、目からうろこが。

3階はヴォールトの天井の部屋です。既に折板天井はボード貼りになっていましたが、2つの丸窓がある空間がありました。

見学の後、この家の奥様といろいろ御話させていただきましたが、この住宅を理解し、大切にしていることがすぐ伝わってきました。おそらく、この中央のY字柱もこの家主たちによって、うまく使われているのだと思います。それが、この家の居心地の良さにもつながっているのだろうとすごく感じました。

当初は1階は仕事の場、2階は生活の場、3階は子供の場、だったそうですが、今は違う使い方をしているそうです。

これからも大切に、この住宅は使われ続けていくのだと思います。この2つの名建築を見て、建築の力、空間の力と言うものを改めて再認識させられました。私はそう思います。

特に設計している建築家と、使っている家主が理解しあって、使い続けることの大切さを感じた見学会でもありました。